

《史料翻訳》

アンリ・トラン

「ドイツ国内のフランスに起源を持つ改革派諸教会への呼びかけ」

林 祐一郎

訳者解題

本稿は、ドイツ・マクデブルクのフランス改革派教会牧師アンリ・トラン Henri Tollin (1833-1902) による書状 „Aufruf an die reformierten Gemeinden französischen Ursprungs in Deutschland“ (1888) の全訳である。ドイツにおけるフランス改革派教会とは、近世にフランス王権からの迫害を逃れて亡命してきた信仰難民ユグノーの教会を指す。この書状は、1888年7月3～12日にロンドンで開催された改革派諸教会の国際会議へ参加したトランが、忘却されかけていたドイツにおけるユグノーの精神の復興を呼びかける内容となっている。トランは翌月の8月8日付でこの書状を作成・複製し、ドイツ各地のフランス改革派教会へ郵送した。

書状そのものは題名を冠しておらず、その内容に上記の題名が付けられたのは、『改革派教会新聞』で全文が公開された時が初めてのようだ (Henri Tollin „Aufruf an die reformierten Gemeinden französischen Ursprungs in Deutschland“, in: *Reformierte Kirchenzeitung*, Nr.37, 15.09.1888, S. 581-588)。ただし、本稿が底本に用いたのは、バート・カールスハーフェンのドイツ・ユグノー協会図書室に「1888年7月3～12日のロンドンにおける汎長老派会議にかんする報告 Bericht über das Pan-Presbyterian-Council vom 3.- 12. Juli 1898 in London」という名で所蔵され、「尊敬すべき (フランス) 改革派教会の長老会へ An das Wohlwürdige Presbyterium der (französisch) reformierten Kirche」と宛てられた、活字印刷による同書状の複製である (Bibliothek der Deutschen Hugenotten-Gesellschaft, Rep. I 187)。

そこには、のちにドイツ・ユグノー協会 (DHV) の初代会長となるトランの、改革派教会の一員としての強烈な信仰心が表現されている。また、この史料のなかに登場する様々な人物たちの経歴や背景は、信仰難民の記憶の復興を夢見る一人の末裔が、改革派教会の国際的な連携のなかで活動していたことを伺わせる。そして、後半部で引用されるトラン自身の演説は、ユグノーの歴史的役割を殊更に強調する、個性的な自己認識の発露である。それゆえ、この「呼びかけ」は必ずしも広範な賛同を得たわけではない。だがこれは、国民統合と世俗化の進む近代ドイツで再び信仰難民の紐帯意識が呼び起こされるきっかけをもたらし、1890年のDHV創設へとつながっていくこととなる。

凡例

- ・原文における引用符は「」とする。
- ・訳文における太字と斜字、また横長太字は原文通りである。
- ・訳文における〔 〕は訳者による補足である。
- ・原文に注釈はないため、注釈は全て訳者によるものである。

訳文

1888年7月3～12日にロンドンのエクセター・ホール¹で開催された汎長老派会議²は、その賛同者たちのきわめて大胆な期待を大きく上回った。世界五大陸全ての**2000万人の改革派キリスト教徒たち**が、そこでは代表されていたのである。イングランド・スコットランド・アイルランドからのみならず、オーストリア・ボヘミア・モラヴィア・ハンガリー・オランダ・ベルギー・フランス・スイス・イタリア・スペイン・ギリシアから、またインド・中国・日本・ペルシア・セイロン島から、さらに南アフリカ・カナダ・アメリカ合衆国・オーストラリア・南洋諸島から、偉大な改革派教会の代表団がロンドンへ殺到したのである。彼らは告知した。全隊列の前進を。異教^{ヘイデントーム}に対する偉大な勝利、すなわち回教徒^{モヘイ}たちに対する、ユダヤ教徒たちに対する、カトリック信徒たちに対する勝利を。内地伝道^{デーナター}の働きと施し、キリスト教徒女性たちの慈善行為^{リベスヴェルデ}、青少年の福音的教育が、長老制度⁴への理解とその形成、豊かさと貧しさとの峻厳な矛盾に対するキリスト教的・実践的調停、純粋無垢な祈りと力強い兄弟たちの執り成し、神の国のために協働する統一と共同への益々の憧憬、真の福音的自由に対する単なる法的な寛容からの人倫的上昇^{ズイットリッペン・エルヘーヴン}が、常に止まることなく

¹ ロンドンの中心部に存在した大きな公会堂。キリスト教青年会（YMCA）の本部もそこにあり、たびたびプロテスタント系団体が大規模な集会を開く場となった。この建物の歴史について詳細は以下を参照。Leonard W. Cowie, „Exeter Hall“, in: *History Today*, 18 (1968), pp. 390-397.

² 汎長老派会議 Pan-Presbyterian Council とは、長老制改革派教会連盟 Alliance of the Reformed Churches holding the Presbyterian System が開催していた、世界各国の改革派諸教会による国際会議。1875年に第一回の会議が開催されて以来、1913年にエディンバラへ移転するまで本部をロンドンに置いていた。現在もその後継組織として世界改革派教会コミュニオン World Communion of Reformed Churches が存在する。<https://wcrc.eu/about/history/detail-timeline/>, 2025年4月4日閲覧確認。

³ 内地伝道 Innere Mission は、広義には国内のキリスト教徒への伝道を意味する言葉だが、ここではとりわけ都市救貧と一体化した伝道事業のことを指しているものと思われる。ドイツでは、1848年にヴィッテンベルクで福音主義教会大会が開催されて以来、ヨハン・ヒンリヒ・ヴィッヒャーン Johann Hinrich Wichern (1808-1881) の呼びかけで、プロテスタント諸教会の協働による社会奉仕事業が推進されていた。その基本的な情報については以下参照。佐藤司郎「市民社会の進展とヨーロッパのプロテスタント教会」高柳俊一・松本宣郎編『キリスト教の歴史2—宗教改革以降—』山川出版社、2009年、124-126頁。

⁴ 一般信徒のなかから選ばれた長老が教会運営を指導するという制度。各地の信徒会衆から選出された代表は牧師と一緒に長老会（小会）を組織し、それらが集まって一定の地域を代表する会議体（中会）、さらにその上位にもっと大きな全国的組織（大会）を構成する。長老制の特徴は、こうした段階的な合議制と共同体構成員代表による自治的な意思決定であり、西欧の民主主義に寄与したとも言われている。以下参照。出村彰「長老制」大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年、750頁。

く成長していることを。「私は、私が不寛容を嫌うのと同じく寛容を嫌う。なぜなら、私は宗教的自由が好きだからだ」。朝 10 時から夜 9 時までエクセター・ホールは一杯になり、夜 7 時から最多で 5000 人が熱心に話し手たちに耳を傾け、熱烈に祈り、快活に歌った。ダイクス校長の示唆に富む開幕説教、たとえ時折いくらか不注意ではあっても深く考え抜かれた、**今世紀の懷疑癖に対する教会の責任**にかんする マーカス・ドッズ教授⁵の議論、テオドール・モノー⁶の**聞き入れられる願いについての経験談と諸提言**、しばしば改革派の平信徒たちからなされた隅々まで手際のよい夜の挨拶の多くが、真にキリスト教的な弁舌の立派な傑作だった。**改革派**の長老制で編成された世界 2000 万の会員から成る**教会**は、**信仰において不屈な真の世界勢力**、ローマの**イエズス主義**⁷に対する強力な防波堤、キリスト教的な**慈悲**と、神において結びついた宗教的な**自由**のための最も固き砦である。きわめて恵み深く、だが刺激的かつ感動的に、感じ取れるほどの**聖霊の流入**、祈りの霊の流入、聖書と信条に対する忠誠の流入、思慮深き知恵の流入、そして大胆にはっきりと区切られた、あらゆる討議に充満してそれを統御する天の平和の流入が働いたのである。そう、**聴許**⁸を伴った祈りの霊が、それをすでに自らに備えているがゆえに。

五大大陸のあらゆる国々のうちで最も弱小な国として**ドイツ**が代表されていた。そう、そもそも、統計に基づく正確な代表の立場を、1,263,326 人の改革派信徒たちを擁する改革派ドイツは享受しなかったのである。というのも、今回の会議に出席した**ドイツの改革派信徒は 10 人**だったからだ。だが一方で、前回のベルファストでの会議ではゲッティンゲンから改革派連盟会長の**牧師ブランデス博士**⁹が唯一のドイツ人改革派信徒として列席していたのだから、これは喜ばしい進歩だ！規約に従う限りでは、この会議は**個々の教会**、すなわち単立の教区ではなく、約 50 ヶ所の改革派教区から成る教会会議的組織を受け入れる。だから改革派連盟も、署名者たちによって代表された 12 ヶ所の**ユグノー教区**も、議決権のある会員として受け入れられることは叶わなかった。しかしながら、出席したドイツ人全員が**通信会員**に指名された。**会議の暖かい共感**はとりわけ我々の 12 ヶ所の**ユグノー教区**にも向け

⁵ マーカス・ドッズ Marcus Dods (1834-1909) は、スコットランドと隣接するイングランド最北部ノーサンバーランド・ベルフォード出身の聖書学者。エディンバラで神学を修め、当時はグラスゴーで牧師を務めていた。以下参照。キリスト教人名辞典編集委員会編『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、1986 年、968 頁。

⁶ テオドール・モノー Théodore Monod (1836-1921) は、フランス・パリ出身の神学者。元々は法学を専攻していたが、留学先のニューヨークで回心を経験し、父の創始したフランス福音主義自由教会連合で牧師となった人物である。以下参照。『キリスト教人名辞典』1670 頁。

⁷ ここでは、カトリックのイエズス会士が陰謀を働く人間の代名詞とされていたことから、歪曲や詭弁によって他人を騙す手口のことを指しているものと考えられる。

⁸ ここでは、神が人の願いや求めを聞き入れて認めること。

⁹ フリードリヒ・ブランデス Friedrich Brandes (1825-1914) は、リッペ＝デットモルト侯国バート・ザルツウフレン出身の改革派神学者。彼の出身国はのちにドイツ帝国の一部となり、改革派が優勢な唯一の構成邦となった。当時は同邦のビュッケブルクの改革派教会で牧師を務めながら、ニーダーザクセン改革派教会連合の会長や、1884 年に成立したドイツ改革派連盟の初代会長を任されていた。詳しくは以下参照。Hans-Georg Ulrichs, *Reformierter Protestantismus im 20. Jahrhundert. Konfessionsgeschichtliche Studien*, Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen 2018, S. 173-178.

られたが、その会議の強い要望によれば、これらの教区は何らかの形で一緒になることができるとのことだった。もしかすると上手く行けば、四年後にアメリカのナイアガラ瀑布より北方のトロントで開かれる次回の**汎長老派会議**までに集まるのではないかと。会議の書記長であるカナダのマシューズ博士は、**世界の全改革派教会との提携**に本気で関心を持っているドイツの改革派諸教区へ汎長老派会議の挨拶を個人的にも伝え、それぞれのやり方で対策を提案できるよう、彼らの特段の困難を観察し、それについて次回の会議で報告を行うだろう。世界の他の改革派信徒たちが**ドイツの兄弟たち**と見事な邂逅を果たしたのは、実に感動的で、真に**兄弟的**で、それゆえに魅力的なことだった。**ロンドンへの受け入れ**は、一つの模範にして無比な、そう、ほとんど信じられないほどのもてなしによってなされたものであり、代表たちの心意気、何よりもアメリカは**献身性**を互いに競い合っていた。

同年7月12日午前、我々**ドイツ人たち**も、我々を派遣した諸教区の挨拶を紹介することを許された。ドイツ人の登壇者4人それぞれが10分を与えられた。最初に話したのが、我々が改革派世界会議へ参入するきっかけをもたらしてくれた改革派連盟の会長、ゲッティンゲンレプホルツ＝ウルツ＝ヴェルト＝コンツィルの牧師**ブランデス博士**である。次が私。その後は東フリースラントの教会会議の議長**クニプハウゼン伯爵**¹⁰。最後はシュターペルモーアから来た牧師**ブランツ博士**。**プレサンセ博士**¹¹と私以外、会議の登壇者はみなできる限り英語で話した。大陸の個々の改革派教区の窮状について詳述する、より小さな会合では、**ドイツで困窮する三つの改革派教区**、すなわち神学校を欠く**ベルリン**のボヘミア人教区、メクレンブルク＝シュヴェーリーンの**ビュッツォウ**教区、そして**ハンプルク**のフランス人教区については、私も英語で話した。

「議長殿！父祖と兄弟たちよ！私は**ドイツの12ヶ所のフランス改革派教区**から派遣され、ロンドンの汎長老派会議に心からのご挨拶を申し上げに参りました。その教区とは、**マクデブルク、プレスラウ、シュテッティン、フランクフルト・アム・マイン、ブレンツラウ、シュトラースブルク・イン・ウッカーマルク、ブルク・バイ・マクデブルク、ミンデン・イン・ヴェストファーレン、グムビンネン、エアランゲン、シュトゥットガルト＝カンシュタット**、そして**ハンプルク**の教区のことです。そのうち、私が担当するマクデブルクの教区については、**議場の誰かが英語を話せない場合、私はドイツ語**

¹⁰ エートツァルト・ツー・インハウゼン・ウント・クニプハウゼン Edzard zu Innhausen und Knyphausen (1827-1908) は、ハノーファー王国出身の改革派貴族。オランダ国境に近い東フリースラント地方の大地主として、故郷がハノーファー州としてプロイセン王国へ編入されると、ホーエンツォレルン家と友好関係を築きながらも地元の利益を守るべく行動した。当時はハノーファー州福音改革派教会の教会総会で議長を務めていた。以下参照。Günther Möhlmann, „Knyphausen, Edzard Fürst von“, in: Historische Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften (Hrsg.), *Neue Deutsche Biographie (NDB)*, Bd.12, Duncker & Humblot: Berlin 1980, S. 235-236.

¹¹ エドモン・ド・プレサンセ Edmond de Pressensé (1824-1891) は、フランス・パリ出身の神学者・政治家。学生時代にアレクサンドル・ヴィネ Alexandre Vinet (1797-1847) の影響を受け、教会史家として活躍した。19世紀のフランス・プロテスタントを代表する人物とされ、1883年以降は終身上院議員となっていた。以下参照。『キリスト教人名辞典』1348頁。

で話さねばならないという特別な任務を負っております。キリストにおける我らが友にして兄弟、パリのエドモン・ド・プレサンセ牧師は一昨日、この場から**フランス語**でお話しされました。したがって、私は**ドイツ語**でお話しします。

私がロンドンの汎長老派会議で代表する荣誉に浴している、ドイツの12ヶ所の教区は、そもそもプロテスタントの、改革派の教区が持ちうるもののなかで最も高貴な起源を享受しております。彼らは**ユグノー**なのです。彼らは知っております、それがどういふことなのかを。^{フガノ・テント・ム}ユグノー性とは、福音的な殉教、神聖な犠牲精神、厳格な教会戒律、驚くべき祈りの聴許の権化であります。ある日、大選帝侯は、彼の妃が見知らぬ男に**全宝石類**の修繕を委ねたのに驚くと、その男の名と住処と金銭状況を妃に尋ねました。選帝侯妃は答えました。「私は何も知りませんよ。でも、ユグノーですから」。一人の**ユグノー**、それで充分なのです。ユグノーが不誠実であることなどありえないのです！

ユグノー教会には、ご存じの通り、二人の**対等な息子**がおります。彼らは互いに、彼らのうちの誰が最もイエスを愛しているのか競い合っております。^{ル・デザール}荒れ野と^{ル・ルフージュ}隠れ家^{インベグリフ}です。隠れ家は荒れ野をより高貴だとみなします。荒れ野は日々、自らの心血を救い主のために捧げてきたからです（拍手）。荒れ野は隠れ家をより高貴だとみなします。隠れ家はその心血より百倍も価値のあるもの、すなわち祖国をキリスト教のために犠牲にしてきたからです（拍手！）。

ロンドンでの会議で私が代表する隠れ家の諸教会はドイツの教会で、12ヶ所のうち9ヶ所が**プロイセン**の教会です。我々、ドイツ＝プロイセンという隠れ家のユグノーたちは、我々ほどに**ドイツ**を愛しているなどとは誰にも認めません。また、我々よりもホーエンツォレルン家を切に愛し、心から敬っているなどというプロイセン人も認めません。ホーエンツォレルン家は単なる我々の**恩人**、我々の諸教区に対する間接ないし直接の後援者、自らの迷信的な臣民たちに対する異邦の信仰同胞たちの庇護者ではないのです——私は、きわめて優れたもてなしがなされているロンドンで、これを言います！——否、我々ユグノーたちは、輝かしきホーエンツォレルン君侯一族のうちでも、ヨハン・ジギスムント以来の**改革派諸侯**、全フランス人のうちで最も高貴な**コリニー提督**¹³の末裔、そして全フランス人女性のうちで最も美しき**エレオノール・ドルブリュー**

¹² 「荒れ野 le Désert」は国内に残留したユグノー達のこと、「隠れ家 le Refuge」は国外へ亡命したユグノーたちのことを指している。

¹³ ガスパール・ド・コリニー Gaspard de Coligny (1518-1572) は、フランスの改革派貴族であり、プロテスタントたちの軍事指導者。ユグノー戦争で活躍したが、「サン・バルテルミの虐殺」(1572)で殺害された。ポツダム勅令を発したブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムの妃ルイーゼ・ヘンリエッテ・フォン・オラニエン Luise Henriette von Oranien (1627-1667) は彼の孫に当たるため、ドイツ皇帝家であるホーエンツォレルン家の先祖にユグノーがいることを主張するさいの根拠として、トランに好んで引用された。例えば以下参照。Henri Tollin, *Ein Ahnherr der Hohenzollern. Charakterbild*, Gustav Harnecker: Frankfurt a.d.O. 1866.

ズ¹⁴を敬愛しているのです。とりわけではしかし、この一族の英雄たる皇帝ヴィルヘルム 1 世が 1873 年の**長老制教会会議憲章**によって全プロイセンの領邦教会を祝福し、そうして**ユグノーたちの計り知れぬ遺産**をプロイセン領の全福音信徒たちの共有財産としたことに我々は喜び、神を讃えます（大きな絶え間のない拍手！）。

しかし、私をロンドンへ派遣した 12 ヶ所のフランス人教区がそれほど真にドイツ的・勤王的・勤皇的であっても、我々は**国際的な血脈**を持っております。ルイ 14 世は、ナント勅令撤回を通じてフランスをカトリックにするばかりでなく、ユグノーに止めを刺そうとした時、自らが意図したのと全く反対のことを達成しました。**彼は世界をユグノーで満たしたのです**。イングランドの他の諸教区はさておき、ロンドンの 32 ヶ所のユグノー教区、オランダの 200,000 人のレフュジエたち、スイスの 200,000 人、ロシア・スウェーデン・デンマーク・ケープランド・アメリカのユグノーたち、彼らはドイツ＝プロイセンのユグノー諸教区を思い浮かべ、彼らの教会、すなわち**隠れ家の国際教会**を思い浮かべております。我々の信仰のあらゆる基礎はラ・ロシェル信仰告白であり、我々の教会的生命のあらゆる規則はフランス改革派教会規律です。ですから、**ドイツから初めて教区としてロンドンの会議へ派遣されたのがユグノー諸教区であることは、偶然だと思いません。隠れ家がまさに神によって造られた改革派ドイツからの橋を残りの改革派世界へと架けるのです**。ゆえに我々は、ドイツのレフュジエたちに改めて、我々が**世界の改革派教会に属していること**を是認するよう願います。いわば、私の心や頭に私の体へ属することを願うことが必要だと、ようやく私の手や足が感じる程度には。我々はあなたの肉の肉であり、あなたの脚の脚です。あなたの霊は我々の霊です。**我々は主において一つです**（盛大な拍手）。

私が代表する 12 ヶ所の教区それぞれに、偉大な歴史があります。私が務めるフランス人教区は多くの方面で、世界の全都市のうちでおそらく最もプロテスタンティズムゆえに苦しんだ都市、**マクデブルク**の福祉を促すのを助けております。**フランクフルト・アム・マイン**のフランス・ワロン人教区¹⁵は、自分たちが貧しいのにもかかわらず、通過する 125,798 人の信仰難民たちに宿を与え、食べさせて助けました。一つの——私

¹⁴ エレオノール・ドルブリューズ Eleonore d'Olbreuse (1639-1722) は、南仏の港町ラ・ロシェル出身の改革派貴族。ブラウンシュヴァイク＝リュネブルク公ゲオルク・ヴィルヘルム Georg Wilhelm, Herzog von Braunschweig-Lüneburg (1624-1705) の妃となり、嫁ぎ先の領地だったツェレにユグノーたちを受け入れるよう夫を後押しした。ルター派が優勢な土地でユグノーたちの利益を守ろうとした彼女は、トランにも好んで引用された。詳しくは以下参照。Andreas Flick, „Der Celler Hof ist ganz verfranzt“. Hugenotten und französische Katholiken am Hof und beim Militär Herzog Georg Wilhelms von Braunschweig-Lüneburg“, in: *Hugenotten*, 72. Jahrgang, Nr. 3, 2008, S. 87-120.

¹⁵ ワロン人 Wallonen とは、スペイン領南ネーデルラント（現ベルギー）のワロン地方から亡命してきた改革派信徒たちのこと。信仰や言語の面で共通点が多かったためにユグノーの仲間だとみなされてきた。1890 年に制定されるドイツ・ユグノー協会の規約第 1 条には、同じくユグノーと近い関係にあったヴァルド派信徒の末裔と並んで、改革派を信仰するワロン人の子孫にも会員資格が与えられるという旨が記されることとなる。Der Vorstand des Deutschen Hugenottenvereins, „Statuten von 1890“, in: Jochen Desel und Walter Mogk (Hrsg.), *100 Jahre Deutscher Hugenotten-Verein. Geschichte – Personen – Dokumente – Bilder*, Verlag des Deutschen Hugenotten-Vereins: Bad Karlshafen 1990, S. 327.

はこれをロンドンで言います——唯一無二のもてなしです。シュトゥットガルトのフランス人教区は長いあいだ、工業の盛んな 12 ヶ所のヴァルド派教区の中心をなしました。ブレスラウのフランス人教区は、ドイツの最も偉大な植民者フリードリヒ 2 世によって創設された唯一のフランス人教区です。エアランゲンのフランス人教区は、ユグノーの自立と独立と教会会議組織のために、勝利に終わる高貴な闘争を戦いました。長いあいだ圧迫され、迫害されて、プロイセン王たちに守られてきたハンブルクのフランス人教区は、今日もフランス語で祈り、説教し、聖体を拝領しております。それは、神の姿を消さないよう微かに光る明かりの芯なのです。おそらく例外的な 12 ヶ所の教区はみな、父祖たちの豊かな慈悲深さと、慈善院・孤児院・基金・豊かな**教会金庫**といった息子たちの賢明な慎み深さに感謝しております。その教会金庫から、彼らは自分たちの貧民たちへ充分かつ迅速かつ親身に必要なもの全てを授けるばかりでなく、財源が許す限り、あちこちの**外聞を憚る〔物乞いをしない〕貧民たち**をも実に意味のある支援に与らせるのです。それでも、こうした教区は死に絶えています。フランス人たちはドイツ人になってしまったのです。改革派信徒たちは大きく立派なルター派の環境に魅惑されてルター派になっております。外からの新たな参入は足りません。そう、かつて**古代のキリスト教の殉教者たち**が、信仰ゆえ野獣たちと戦うため闘技場へ上がったとき、自らの間近な死を前に、ローマ皇帝へ「死にゆく者たちから敬意を」という言葉で挨拶したのと、我々も同じようにロンドンの汎長老派会議に挨拶します。しかし、我々は付け加えます。神のお気に召すより一秒でも早く死ぬことはありません。改革派の、**ユグノーの信仰のために最後の血の一滴まで戦い**、我々は偉大にして不死なる全世界の改革派長老制教会と一体で生きて死に、神のお気に召す限り、祈り、愛し、信じ、耐え、望むのです。我々のために死んで、我々のために復活した救い主、イエス・キリストの霊において。

(大きな、絶え間のない拍手)

ロンドンの会議でのドイツ語の挨拶をもって、全権を授けていただいた 12 ヶ所のユグノー教区を、私が適切かつ立派に代表したかどうか判断するのは、今や皆さん次第である。

ロンドンの会議にかんするより詳細な報告は英語で刊行されており¹⁶、ドイツ語版はカラムス¹⁷とハプケ¹⁸とベランギエ¹⁹によって**改革派系の雑誌類**、またライヒスボーテ紙で刊行されている。同年 10 月 10 日夜 8 時には、私がいわゆるフランス人居留区の水曜協会²⁰で会議にかんする講演を行う。

しかし、本当に望んでいたのは、**我々ドイツのユグノーたち**に財源と方策がある限り、**我々を互いに近づけ**、例えば**ユグノーにかんする事柄**について議論・提言がなされる一日を一年のうちに定めるといった自由な方式で、あるいは別の方式で提携させるという**実務上の取り決め**を、汎長老派会議と改革派ドイツが結ぶことだった。無論、元からユグノー系である長老会はそれに関心があり、興味を持ち、感激し、供物を捧げ、募るはずだ。**ドイツの全改革派長老制教会が一緒にロンドンの会議に出席していたら**、一番好ましかった。その結果は、**古の高貴なユグノー精神の覚醒**^{エマージェンツ}だっただろう。「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく、強く生きなさい」²¹と、「コリント人への第一書簡」第 16 章第 13 節で神が命じたように！

マクデブルク、1888 年 8 月 8 日。

キリストに従うあなたがたの兄弟にして下僕

アンリ・トラン博士

フランス改革派教会説教師

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

¹⁶ William G. Blaikie (eds.), *Alliance of the Reformed Churches holding the Presbyterian System. Minutes and Proceedings of the Forth General Council, London, 1888*, Presbyterian Alliance Office: London 1889. トランの演説は pp. 272-274.

¹⁷ ハインリヒ・カラムス Heinrich Calaminus (1842-1922) は、ヘッセン大公国ハーナウ出身の改革派神学者。のちにエルバーフェルトへ移り、ドイツ改革派連盟の機関紙となる『改革派教会新聞』の主筆を務めていた。詳しくは以下参照。Hans-Georg Ulrichs, *Reformierter Protestantismus im 20. Jahrhundert. Konfessionsgeschichtliche Studien*, Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen 2018, S. 178-182.

¹⁸ カール・エミール・ヘルマン・ハプケ Karl Emil Hermann Hapke (1833-1908) は、ベルリンの改革派牧師。ボヘミア系のバツレーム教会に務め、プロイセンにおける改革派信仰の擁護に尽力していた人物だった。以下参照。Ursula Bach, *Auszug und Ankunft. Der Weg der Evangelisch-reformierten Bethlehemsgemeinde durch drei Jahrhunderte*, Presbyterium der Evangelisch-reformierten Bethlehemsgemeinde: Berlin 2002, S. 13.

¹⁹ リヒャルト・ベランギエ Richard Béringuier (1854-1916) は、ベルリン出身の地方判事・系譜学者。先祖はユグノー系で、ベルリン・フランス改革派教区の役員会にも属していた。トランらと一緒にドイツ・ユグノー協会 (DHV) を創設するなど、ドイツにおけるユグノーたちの結集に協力した。以下参照。Ursula Fuhrich-Grubert, „Louis Léopold Richard Béringuier“, in: Jochen Desel und Walter Mogk (Hrsg.), *100 Jahre Deutscher Hugenotten-Verein. Geschichte – Personen – Dokumente – Bilder*, Verlag des Deutschen Hugenotten-Vereins: Bad Karlshafen 1990, S. 169-176.

²⁰ 水曜協会 Mittwochsgesellschaft とは、ベルリン・フランス改革派教区を中心としたユグノー系ドイツ人たちの交流団体。1886 年から前述のベランギエが主宰者となり、のちに DHV の機関紙となる『フランス人居留区』を発行していた。Fuhrich-Grubert, a.a.O., S. 170-171.

²¹ 共同訳聖書委員会編訳『聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき 引照つき——』日本聖書協会、1998 年、(新)323-324 頁。